



## 見学会レポート シルク博物館

(〒231-0023 横浜市中区山下町1番地 (シルクセンター2階))

2017年の見学会は、11月25日土曜日、横浜市のシルク博物館を訪れました。晴天にも恵まれ、博物館のある大栈橋近くの開港広場は、晩秋の横浜散歩を楽しむ人、スケッチをする人などでにぎわっていました。

横浜は、1859年の開港以来、日本の貿易の中心地として発展してきました。当時、日本からの輸出の中心は生糸でした。生糸は、陸路や河川を使って横浜に運ばれ、世界中に輸出されたのです。こうして、日本の蚕糸業は、日本の経済を支え、近代化に大きく寄与したのです。

横浜はシルクの街ともよばれ、貿易の中心地として発展、さらに海外の文化を日本中へ広げる拠点となっていきました。

シルク博物館は、神奈川県、横浜市及び関係業界の協力によって建設されたシルクセンター国際貿易観光会館の重要な一事業として、横浜開港100年記念事業として、1959年に開設されました。

会館の建設された場所は、開港当初に英国商社ジャーディン・マセソン（英一番館）のあったところ、つまり横浜開港以来の中心地です。

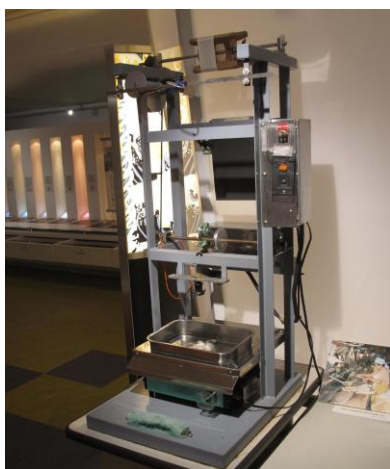
スーパーコンポジット研究会では、これまでも講演会、討論会で絹、シルクを取り上げてきました。繭が作る細かい糸から、生糸を作り、絹織物まで仕上げることは、サイエンスとしても、産業としても、非常に興深いものです。シルク博物館の展示は、あらためて、それを感じさせるものでした。

<シルクのあゆみ>コーナーでは、世界の民族衣装が紹介されています。洋の東西を問わず、機的美しさを引き立たせる工夫がされているのがわかります。

また、日本の衣料の歴史が紹介されており、日本人がどのような服装をして今日に至っているのかを知ることができます。

日本では絹織物といえは和服・着物が中心ですが、着物を着る機会がほとんどなくなった現在では、シルク、絹に触れる機会も減ってきています。シルク博物館では、子供たちに対してもっとシルクに親しんでもらうための様々な企画、イベントを行っています。繭からの糸作りや、人形づくりなどで、実際に絹に触れることができます。

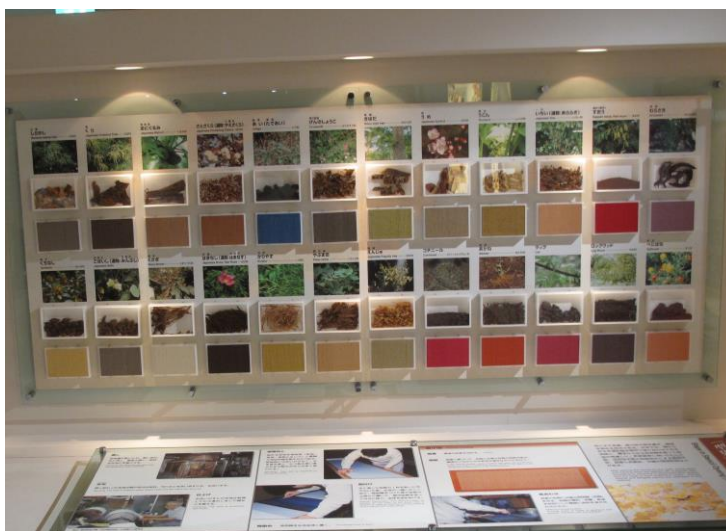
真綿づくり、真綿から太糸作り、袋真綿を用いた結城紬の手つむぎの技法による紬糸づくりなどを体験することができます。また、はた織りの体験は常時可能とのことです。



繭から糸をとる実演



はた織りの様子（実演ではありません）



自然界の素材を使った絹の染色